

P227[ルノ一宛]③:『日本のリージョナリズム』=仲間内・家族的共同體 C'への沈湎(D1の至小化)と演技の狭さ(Eの至小化)との關聯》…

P227「彼(緒形拳)の安全圏といふのは新國劇譲りの土著性(D1の至小化:『日本のリージョナリズム』=土地・仲間内・家族的共同體 C'への沈湎:D1の至小化)と持つて生まれた愛嬌(癖=Eの至小化)との混合物であり、北斎(の演技)もそれで成功したと言へる。が、考へて見れば、(中略)戦後、硬派の時代は去り、庶民的(D1の至小化:『日本のリージョナリズム』=土地・仲間内・家族的共同體 C'への沈湎:D1の至小化)な落語は生きのびられても、侍を主人公(天C⇒武士道:D1の至大化)にした講談は生きのびられない平和な大衆社會(『日本のリージョナリズム』)の到來を豫知したからであらうが、同時に彼自身(△枠)のうちに立役、英雄役者の素質が無い(D1の至小化?)と悟つたからに違ひ無い。(彼は)今まで成功疑ひ無し、さういふ『庶民的』(D1の至小化:『日本のリージョナリズム』=土地・仲間内・家族的共同體 C'への沈湎:D1の至小化)な時代(C)が恐らく彼の生涯(△枠)を通じて續く(D1の至小化)だらうと思ふからだが」。

P227「作者も演出家(△枠)も、そして觀客(△枠)も同じ泥臭さ、灰汁の強さ(Eの至小化)に惹かれてゐるのではないか(D1の至小化)、ひょつとすると當人(△枠)まで、さう思つてゐるかも知れない」。

*「文化なき無政府状態(D1の至小化)」なら演技も狭くても可(Eの至小化)なり、つまり、以下の「D1の至小化=Eの至小化」を恒存は言つてゐるのだ。

P226「泥臭さ(Eの至小化=唯の癖を個性と取り違へ)が藝の味(D1の至小化)であり、灰汁の強さ(Eの至小化=唯の癖を個性と取り違へ)が役者の魅力(D1の至小化)であるといふ事になります」=庶民的・土著的(D1の至小化)の換言。

P227「少なくとも彼(リチャード・ワイドマーク)のこなし得る柄(E)の領域は廣い(Eの至大化)。西部劇のカウボーイから、アメリカ大統領まで、どんな職業、身分、性格の役(D1)を振られても、少しもをかしくはない(即ち『主題 C' ⇒ 役: D1の至大化 ⇒ 演戲: Eの至大化』と言ふ事)」。

